2022年九州学院育友会講演　　2022年11月18日

九州学院ブラウン記念チャペルにて

「太平洋戦争終結に貢献した３人の九州学院OB」

九州学院創立100周年記念歴史資料・情報センター長　藤本　誠

【プロローグ】

皆さんこんにちは。今日は３年ぶりの育友会講演会の開催となりました。只今、ご紹介に与りました講師を務める、藤本です。私は日本福音ルーテル熊本教会の信徒として九州学院で４０年勤めましたが、九州学院創立100周年の際には『九州学院百年史』の編著者としても尽力いたしました。現在、九州学院歴史資料・情報センター長を務めています。たぶん、九州学院の創立や歴史などについては、私が一番詳しいのではないかと思います。

今日はまず創立100周年記念事業の一環として制作された『百年の想い世代を超えて』の貴重な動画の一部を観ていただいて、その後追加の講演をいたします。それでは始めます。

1　1945年・昭和20年8月15日、昭和天皇の「戦争終結詔書」玉音放送で太平洋戦争に終止符が打たれました。そしてビデオ動画でご覧になったように、9月2日、日本の無条件降伏文書調印式がアメリカ第３艦隊旗艦・戦艦ミズーリ号艦上で行われました。この歴史的調印式に、九州学院で学んだ３人の人物が関わっていたのです。連合軍側の通訳として第28回卒業生・**竹宮帝次**氏と第23回卒業生・**トーマス時雄坂本**氏、日本側の通訳として第22回卒業生・**和田隆太郎**氏がいました。

2　**竹宮帝次**氏は、日本の敗戦処理のために重要な働きをした代表的人物です。竹宮氏は、1923年・大正12年にアメリカ・カリフォルニア州に生まれ、ハイスクールまでアメリカで暮らして日本に帰国しました。1941年・昭和16年の日米開戦時は九州学院に在学し、当時18歳でした。1939年・昭和14年、排日運動の高まりに危機感を抱いた父親がアメリカを引き払い、祖父母の故郷・熊本で暮らすことを決意。竹宮家は一家を挙げてロスアンゼルスから引き揚げました。

3　九州学院はルーテル教会の宣教師や米国留学経験者が教鞭を執るなどアメリカとのつながりがあり、日系２世の受け入れに熱心でした。台湾や朝鮮半島からの生徒にも広く門戸を開いていました。当時の九州中学校に入学時16歳だった竹宮氏は、日本語があまりできず、まず日系２世対象の特別クラスで日本語を学びました。東門とチャペルの間にあった図書館で半年から1年間の日本語学習を経て、その後一般のクラスに編入し通常の授業

を受けるようになりました。在学中に太平洋戦争が勃発し、日系２世の生徒たちは戦時中、敵国のスパイであるかのように憲兵から監視され尾行される辛い日々を送りました。

4 今、ウクライナではロシアの理不尽な侵略による戦争が続き、なかなか終結の兆しが見えませんが、ここで太平洋戦争の時代、九州学院が置かれていた当時の状況を皆さんといっしょに振り返ってみたいと思います。

1939 年・昭和 14 年 9 月 1 日、ドイツ軍がポーランドに進攻して第 2 次世界大戦が始まると、3 日にはイギリスとフランスがドイツに対し宣戦布告。欧米各国は戦争体制強化へと向かいます。この年の 2 月 3 日には「九州学院耐寒夜間行軍」が開催され、全学院生 750 人が参加。松橋まで往復 48 キロを行軍しました。

5 6 日からの国民精神作興強調週間には「銃後ノ国民」としての自覚を促す朝礼説教が行われました。第 2 代稲冨院長は、6 月から 8 月まで中支および満州に視察のため出張し、学院卒業生の前線兵士の慰問をしています。

6 1925 年・大正 14 年 4 月、「陸軍現役将校学校配属令」が制定・公布されると、九州学院にも陸軍現役将校が配属されました。それ以降、学院の教育現場で軍事教練が常時実施され、12 月には軍事教練の査閲が行われていたのです。

1940 年・昭和 15 年 3 月 10 日の紀元 2600 年陸軍記念日に、熊本の第 6 師団では日露戦争奉天会戦の模擬戦を花岡山で開催しました。それが熊本放送局から実況放送されると、学院生もラジオの実況に聴き入りました。

7 昭和 15 年 4 月、第 2 代稲冨院長はルーテル教会の要請を受けて、日米関係改善へ向けた米国各地での約半年にわたる時局講演のため渡米しました。現地ではカリフォルニア在住の卒業生とも会合を持ちました。

8 9 月 27 日に「日独伊三国同盟」の調印が行われると、ミラー主事は宣教師会報告で、戦争と国家主義運動の「異常な時代」と表明しています。11 月には熊本県「外国人教員に関する調査」が実施され、九州女学院長エカードと慈愛園長パウラスが辞任し、翌年帰国。九州学院のミラー主事夫妻も 1941 年・昭和 16 年 3 月に休暇・帰国し、シリンガー宣教師はスパイの嫌疑がかけられ解雇され帰国しました。

9 10 月には学院で防空退避演習が行われ、11 月 1 日には軍国主義体制下の創立 30 周年記念式典が挙行されました。ブラウン記念礼拝堂の正面聖壇には国旗「日の丸」が掲げられ、記念の体育大会も開催されました。記念行事が終わると、生徒たちは普段の勤労奉仕

で桑畑開墾に従事しました。そして昭和 16 年 12 月 8 日、ハワイ真珠湾攻撃によって米英に対し宣戦布告。日本は太平洋戦争へと突入しました。

１０　1942 年・昭和 17 年 1 月には、学院の教職員・生徒 1,000 名が、配属将校永田中佐の指揮のもと菊池神社往復 15 里・行程 60 キロの行軍を行いました。4 月からは学院でも毎月 8 日に防空訓練が行われるようになりました。11 月に熊本市文化報国会が発足すると稲冨院長は生活文化局長に就任し、翌年には大政翼賛会県支部常務委員と県文化委員会幹事長に就任します。

１１　1943 年・昭和 18 年、日本軍は南太平洋からの撤退を余儀なくされ戦局が厳しくなってきます。4 月 1 日「中等学校令」が改正施行され、修業年限を 4 年に短縮。教科書が固定化されました。それと同時に「九州學院」が「九州中學校」と改称させられ、ミッションスクール色が払拭されました。校章も横文字の「KG」から「九學」に変更を命じられました。同じミッションの「九州女学院」も「清水高等女学校」に改称させられたのです。

１２　九州中学校の生徒たちは、春は農村での勤労作業に動員され、秋は勤労奉仕団として出動し稲刈りの勤労作業に従事しました。9 月には熊本市男女中等学徒延べ 15,300 名が飛行場の草刈り整備作業に動員され、学院生も飛行場で奉仕しました。

　1944 年・昭和 19 年 4 月 21 日には稲冨院長が県翼賛壮年団長に就任。第 2 代チャプレンを務めた稲冨院長は、それを「自らに負わせられる十字架として」負い通したのでした。

１３　1944 年・昭和 19 年の 5 月には戦時下の増産作業の一環で校庭が畑に耕作され、6 月には全校生徒が勤労作業に動員されました。4, 5 年生は鹿児島県鹿屋の海軍航空隊に動員され、1～3 年生は各地での麦刈り勤労に動員。8 月には鹿屋航空隊から帰ったばかりの 4, 5 年生が菊池の花房飛行場の整地作業に動員されました。

１４　9 月には第 2 回学徒動員令により学院の 4, 5 年生も健軍の三菱重工飛行機工場に動員され、1～3 年生は校庭で防空壕の整備に従事。校庭の畑では唐芋と麦作りに励みました。県では学校防空の徹底を各学校長宛てに通達し、米軍の焼夷弾に対する防空態勢強化のため寄宿舎の天井板をはずす作業が行われました。11 月 21 日には中国から米軍機 B29・80 機が九州西部に来襲し、熊本市花園町柿原に爆弾が投下されたのが熊本県下への空襲の始まりとなりました。

１５　1945 年・昭和 20 年 3 月、県で学校の兵器工場化が進められ、九州中学校も濟々黌・

熊中・鎮西・尚絅とともに体育館等を工場化する準備に着手。この年度から修行年限が 4 年制となったため、5 年生（第 30 回卒、169 名）と 4 年生（第 31 回卒、227 名）が同時に卒業。4 月 1 日には九州中学校に実務科（修業年限 1 年）が設置されました。

１６　九州中学校では授業はできる限り継続されましたが、連日空襲警報のため授業中止が続きました。3 月 18,19 日には米軍艦載機が県内各地を空襲。健軍の三菱航空機工場が爆撃されて、市内の各学校等へ工場疎開が行われ、九州学院にも体育館に旋盤等が持ち込まれました。

１７　7 月 1 日夜半から 2 日未明にかけて、マリアナ基地から飛来した第 73 爆撃飛行団の B29・150 機による大空襲では、熊本市内が壊滅的な被害を受けました。

空襲警報とともに寄宿舎にいた 1, 2 年生は校庭の防空壕に退避。構内南東の体育館に焼夷弾が落ち、稲冨院長は生徒たちと共に消火・防火作業に当たり延焼を防ぎました。

１８　稲冨院長が構内の院長宅から飛び出して行くときの様子を、子息・稲冨昭氏（第 30 回卒）が、こう回想しています。

「父は空襲が始まるとすぐ学校に出かけるといって一度庭先まで行ってからまた帰ってきて『或いは今夜自分も爆弾で死ぬかもしれないので一言だけいい残しておく。自分はこの上着のポケットに聖書を入れている。自分は今迄全てのことをこの聖書を通じて祈り、信じる道を行って来た。これからもそうするつもりである。このことだけははっきり覚えておくように』といって出て行った」。

１９　昭和 20 年 8 月 6 日、広島に世界最初の原爆が投下されると、8 日、ソ連が対日宣戦を布告。9 日には長崎に原爆が投下され戦争終結へと向かう中、8 月 10 日、県下各地に早朝より約 210 機の爆撃機が来襲。この熊本市第 2 次大空襲により中心市街地が焼失し、学院も米軍機の機銃掃射を受けました。これは当時学院の東側にあった騎兵隊や 13 連隊の兵舎を狙った攻撃の流れ弾によるものでした。その機銃弾が、本館屋内に置かれていた「学院長杯」を貫通したのです。そして、不運にも 4 年生の 1 名が銃弾の大腿骨貫通により亡くなり、1 名が重傷を負いました。

8 月 10 日は当時 1 学期の最終登校日で、なんと終戦の 5 日前の出来事でした。翌日の 11 日から 31 日まで夏休みに入る前日に、この悲劇が起きたのでした。

２０　8 月 15 日、昭和天皇の「戦争終結詔書」玉音放送によって終戦を迎え、戦時体制下の学院の苦難の時代にも終止符が打たれました。1931 年・昭和 6 年の創立 20 周年のとき

作られたこの「学院長杯」は、14 年におよぶ九州学院の激動の時代を見据えて来たのです。

２１　第 2 代チャプレンとして、そして第 2 代学院長として、九州学院の激動の時代を牽引してきた稲冨肇院長は、「自らに負わせられる十字架として」軍国主義体制を主導する県翼賛壮年団長等の要職にあえて就いて、九州学院を守り導いたのでした。

　機銃弾が貫通した、痛々しい学院長杯は、イエス・キリストが十字架に架かって人間の罪を贖（あがな）われた、その痛みを、暗に物語っているかのように思われてきます。

２２　さて、こうした太平洋戦争中の 1943 年・昭和 18 年に**武宮帝次**氏は卒業し、青山学院大学に進学。しかし同年の学徒出陣で海軍に入隊すると、特殊潜航艇の艇長として呉で訓練を受け小豆島の基地で出撃命令を待つ身となりました。しかし、終戦間際に海軍軍令部に転属となり、慶応大学日吉校舎にあった海軍の地下壕で米国のラジオ放送傍受をする任務に就きました。そして、海軍少尉として終戦を迎えます。

２３　その竹宮少尉に大役が降りかかります。終戦後の 8 月 27 日、1 週間後の 9 月 2 日の降伏文書調印式をひかえ、米国との事前折衝の通訳を命じられます。竹宮少尉は日本軍令部の参謀大佐らと駆逐艦「はつかぜ」で伊豆大島沖に停泊中のミズーリ号に向かい乗艦すると、士官室に通されました。交渉場所の士官室は関係者ですし詰めの状態で扇風機も役に立たず、汗を拭いながら話し合いを続けました。竹宮氏は、その時のことをこのように述べています。

「乗艦の際、大佐の短刀とベルトは没収され、代わりに荷造り用のロープが渡され、交渉というよりも要求で、これが無条件降伏かと実感した。」

２４　事前の打ち合わせは食事も与えられないまま、通訳としての任務は 8 時間にも及んだといいます。第３艦隊参謀長ロバート・カーニー少将から、「横須賀鎮守府および海軍航空基地の明け渡しに関する文書」と「横須賀占領軍司令官オスカー・バッジャール少将名による武装解除、海岸防備、宿舎、衛生などに関する指示書」が手渡されました。米軍の横須賀上陸とミズーリ号の停泊位置を事前に打ち合わせるのが目的でした。竹宮氏は、日本が不利にならないように誠心誠意交渉に臨み、日本の戦後処理に多大の貢献をしたのです。

２５　8 月 30 日、1 万 5000 余名の米兵が軍艦から次々と上陸。横須賀鎮守府は米海軍基地となり、進駐が開始されました。竹宮氏は、これで軍隊から解放されると思いましたが、初代基地司令官となったオスカー・バッジャール少将は、竹宮氏を通訳に指名。9 月 2 日の調印式を前に「全砲口を初桜へ向けた米艦数十隻を見事に東京湾内へ誘導した」ことや、

通訳を超える行動力と英語力が高く評価されて、司令部配属を申し渡され、米海軍に雇用されたのでした。

２６　以後、半世紀にわたり横須賀の米海軍基地に勤務し、港湾統制部最高責任者や民事部長を務め、横須賀基地と市民の橋渡しの役割を果たしました。1964 年・昭和 39 年、アメリカ海軍の原子力潜水艦が日本に初寄港したときには、エドウィン・ライシャワー駐日アメリカ大使の会見を通訳したのも竹宮氏でした。米空母の初配備では地元調整に尽力し、池子住宅問題では、米幹部に日本の環境調査受け入れを説く一方、地元首長に、米軍の巨大な抑止力が地域の安定につながると説明し続けました。基地前でデモ隊と語ることもあったそうで、米軍側は竹宮氏を「大事な宝」と呼び、海上自衛官、歴代外務次官にも信頼を寄せられる人物でした。

２７　1997 年・平成 9 年、73 歳で在日米海軍横須賀基地司令部民事部長を最後に退職。米海軍横須賀基地池子支所には竹宮氏の功績を讃えてネーミングされたレストラン＆バー「クラブ・タケミヤ」が、現在も基地で働く米海軍関係者のオアシスとして使われています。2010 年、86 歳で病没し召天されました。

２８　1945 年・昭和 20 年 8 月 30 日、ダグラス・マッカーサー太平洋方面連合軍総司令官が、神奈川県厚木基地に降り立ち記者会見を行いました。その時、国際新聞の付属将校としてマッカーサー元帥のすぐ背後に立ち、連合国と日本の記者団に対応したのが、第 23 回卒業生・**トーマス時雄坂本**でした。九州学院を卒業して、まだ 7 年しか経っていませんでした。

２９　坂本氏はマッカーサー司令部付のエリート情報士官で、ミズーリ号艦上での無条件降伏文書調印式でもマッカーサーの通訳として活躍しています。坂本氏は、実際に使用された降伏文書の草案の検分もしていました。

３０　坂本氏は 1918 年・大正 7 年、サンフランシスコに近いサンノゼで 8 人兄弟の長男として生まれ、1934 年・昭和 9 年、16 歳の時に日本で教育を受けるため、父親の故郷である熊本へ帰されました。熊本では九州学院で 4 年間学び、1938 年・昭和 13 年 3 月に卒業しました。父親は上益城郡矢部町の出身です。坂本氏はこのように振り返っています。
「親は私が長男ということで日本で教育を受けさせました。九学では熊本市の九品寺におられた剣道の紫垣正弘先生に預けられ通学しました。おかげで剣道は二段。帰国して一時サンノゼで剣道を教えたこともありました。」

３１　紫垣正弘先生は、九州学院第１回卒業生で九州学院剣道教師、剣道八段の範士でした。1924 年・大正 13 年に創設された「九州学院敬愛会」の会長を務めたキリスト者でした。

九州学院で剣道二段の腕前となった坂本氏は、試合で全国を回り、軍事教練にも参加しました。教練の教官だった将校に日本の士官になることを勧められましたが、アメリカ人であることを理由に断ったため、教官は激怒し坂本氏を裏切り者扱いしました。

３２　九州学院を卒業すると同時に坂本氏は、カリフォルニアの家族に呼び戻されると両親と農業に従事し剣道も教えていました。1941 年・昭和 16 年 2 月、初の徴兵制にかかり米国陸軍に入隊。一兵卒としてワシントン州で 3 ヶ月の歩兵訓練を受けた後、「日米開戦もありうるというので、語学学校の先生にならないか」という誘いを受けたのは、パールハーバー攻撃直前の 11 月初めのころでした。

３３　サンフランシスコのプレシディオ（軍用地）で 60 人の中の語学兵に選ばれ、陸軍情報部日本語学校がミネソタ州に移ると、第 1 期生として卒業しました。第 1 期生の中でも成績優秀だったので、そのまま陸軍情報部日本語学校の教官として残るように命じられ、第 2 期生以下を教えることになりました。坂本氏の家族は、この時アーカンソー州の強制収容所に収容され逆境の中にあったのでした。九州学院時代の 4 年間で学んだことが存分に発揮された時期でもありました。

３４　1943 年・昭和 18 年 7 月、坂本氏はオーストラリア・ブリスベンにあったマッカーサー司令部の連合軍翻訳通訳部に派遣され、ニューギニアからフィリピン上陸作戦に参加。日本軍の作戦書類の翻訳、捕虜の尋問、日本兵への投降の呼びかけなどの任務を果たし、まさに「マッカーサーの耳」となって働きました。

３５　ミズーリ―号艦上での無条件降伏文書調印式後はマッカーサー元帥の国連軍総司令部（GHQ）付きになり、以後 3 回 10 年間にわたって日本で勤務しました。

坂本氏は、1970 年・昭和 45 年 1 月に退役するまで、18 年間軍務につき、朝鮮戦争、ベトナム戦争にも参加しています。退役後は、元陸軍大佐として住友銀行シアトル支店長の要職に就きました。

３６　一方、1945 年 8 月 30 日、マッカーサー元帥の厚木飛行場での記者会見の場で坂本氏が遭遇したのが、九州学院第 22 回生の**和田隆太郎（ジミー・ワダ）**氏でした。和田氏は

ハワイ太平洋学院から1935年・昭和10年7月15日付けで九州学院3年1組に編入学しています。坂本氏よりも1年早い1937年に卒業して、明治大学に進学。同大学では野球部に所属し、1941年6月にはハワイ遠征に参加しています。その後、日米開戦前に日本海軍の軍属として志願し、英語力を生かして、諜報通信関係の特信班で働きました。

３７　9月2日、ミズーリ号艦上で日本の無条件降伏文書の調印式で、日本側全権の重光葵（まもる）外務大臣の通訳を務めたのが、ハワイ出身の日系2世・**和田隆太郎**ではないかと言われています。

重光全権大臣は1931年・昭和6年、上海天長節爆弾事件で右脚を切断したため義足でした。杖をついてミズーリ号艦上に毅然として踏ん張り、降伏文書調印を「不名誉の終着点ではなく、再生の出発点である」と捉え、太平洋戦争に終止符を打ったのでした。

３８　校訓「敬天愛人」と「自分で自分を監督し、役に立つ善人となれ」の教えのもとで、共に九州学院で学んだ3人が、戦艦ミズーリ号艦上での無条件降伏文書調印式および戦後処理という歴史的な場面で出会っていたのです。

太平洋戦争終結と戦後の平和な民主主義の時代を築くために貢献した３人の九学 OB の出会いに、私は神の計らいとでもいうべきものを感じざるを得ません。

【エピローグ】

３９

今、九州学院で学んでいらっしゃるお子さん方の授業時間と同じ約５０分の講演でした。集中して傾聴できた学びの時となったでしょうか。皆さんも久しぶりに学生時代を思い出されたのではないかと思います。

ロシアから奪還したヘルソンを訪れ、ゼレンスキー大統領が希望をこめて言ったように、これが「戦争の終りの始まり」になるように祈りたいと思います。一刻も早くロシアの侵攻によるウクライナの惨劇が終結し、人々に平和が訪れんことを祈りつつ、今日の講演を終わりにいたします。

ご清聴、誠にありがとうございました。